

# ひきセン通信



もくじ

- 1 履歴書についての私的意見/X4000SEED
- 2 ひきセン川柳、整いました。其の三。  
「就職」は恐怖の言葉だった/御手元龍馬

ひきセン通信は新潟市ひきこもり相談支援センターの利用者さんの声で作っていく不定期刊行物です。

新潟市ひきこもり相談支援センター

TEL 025-278-8585 (相談・予約専用ダイヤル)

## 履歴書についての私的意見

XSEED4000

私は現行の履歴書に対して不満があります。理由は履歴書をいちいち手書きすることが面倒と感じるからと、失敗するとゴミになってしまうからです。1枚書くにも最低25分近く私の場合はかかります。1日に15枚が最大限に感じます。もちろん書いていく過程で人間どうしてもミスをするもので、専門学校を専修学校と書いてしまったり、平成23年3月入学、平成23年4月卒業など数字や細かいミスを連発し、たった一文字間違えたがためにすべてが台無しになる経験を多くの方がしたと思います。そのたびに私は大きな挫折感を味わいます。下書きすればいいじゃないかと言われますが、個人的にはあんまり好きではないです。鉛筆で書き、そして消す。下書きの時間と清書の時間でかるく1時間はかかることになり効率的に思えないからです。

しかしこれだけ努力して書いた履歴書も結局、採用側はほとんど最終学歴の部分と資格・免許と志望動機欄の部分だけに注視し、結局多くの場合、字が綺麗だったり写真がよかったりなどは別にしろ、ほとんど読まれなくて終わるケースが大半だと思います。(特にどこどこ中学校卒業なんて普通見ません) なので履歴書が絶対にコピーではダメという根拠が強くないと思います。結局履歴書も人物の判定指標に過ぎませんし。

話がやや変わりましたが毎年必ず送られてくる年賀はがきも多くの方は、パソコンで作成しインクジェットプリンターで印刷したものが届いていると思います。昔は自分でインクに色を塗ってオリジナルの下手な年賀はがきを作っていた記憶があります。その中でワープロの年賀はがきが相手様から届いた際には、うわー私の家よりも進んでいてカッコイイと思ったものです。(2000年前後まではこうした傾向が強い時代でした) なので今ではインターネットやワープロソフトの普及率が高いのでそういったものの履歴書や、1枚自筆の履歴書を書き(志望動機欄など除く部分)それを大量にコピーするというコピー制も許可されてもよい時代なのではないでしょうか? そして志望動機の部分は自筆でという形式です。

しかし企業側に立って考えた場合に、自分の企業を第一志望として応募してきたと考えたいということで、自筆の手紙の方がコピーものよりも心がこもった人間の温かさみたいなのを求めたい気持ちも分からなく在りません。しかし多くの新卒者の場合は1社だけでなく複数の企業を受けているわけでしょうし、確かに企業側はそれを踏まえたうえで『御社が第一志望である』と入社希望者が言いつつも、別な企業を受けているかどうかアンケートする企業もあるくらいですから、現実的には暗黙の了解となっているのでしょうか。履歴書自体の出来よりも結局、基本的に採用するのは企業にとってその人物が利益になるかが重要な問題なはずで。汚く言えば金儲けになる人材かということです。履歴書がいくら綺麗に書かれ、高学歴であってもミスマッチならば意味がありません。あくまでも金にならなければ意味がないです。どんなに綺麗で美しく完璧で資格欄のびっしり埋まった履歴書でも。以上の話などから私はコピー時代の履歴書でもいいと思います。履歴書を書くのが好きでたまらない人は別でしょうが、多くの方の場合あれほど苦労して書いた履歴書も書類審査も通らずにシュレッダーにかけられ処分されてしまうことに、悲痛を感じているかもしれません。しかしこうした、まだ個人的には時代遅れな企業慣習が今後も継続するとは思いますが、賛否両論あると思いますが。書いている側からすれば膨大な時間がかかる作業であるとはいえますね。履歴書販売会社の利益の部分もありますし。

空前の大不況で皆さんも履歴書など頑張って書いていくと思いますが、絶対に自分が希望する職種や第一志望の企業に受かって欲しいですね。皆様にお祈り申し上げます。でも私は・・・。

## ひきセン川柳

たすけてと  
さけんでみたいが  
こえがでず

いい人と  
めぐり合えれば  
いいのにな

気がつけば  
財布の中に  
金がない

ひきこもり  
星の数ほど居るそうだ  
一番星になろうかな

## 「就職」は恐怖の言葉だった

御手元龍馬

お金がいる、仕事を探そう、ひきこもり生活にも「うんざり感」がある、さてどうしよう。そこから僕の社会復帰は始まった。でも、就職先を探そうだなんて大それた考えは持てなかった。

——就職でしょう？　そこでずっと働くわけでしょう？　正社員だったのに自己都合で僕は2度も退職してるんだよ。またそんな失敗を重ねてしまうかもしれない。今度はひきこもりだけじゃすまないかもしれない。怖すぎる。生涯をとおして情熱を傾けられる仕事像を、どうして20代後半で決断できるだろう。配牌を見ただけで上がり役を決めてしまうようなものだろう？

「就職」という言葉は、当時の僕にとって恐るべき重みを持っていた。

——就職怖い。短期の仕事をしよう。派遣でもバイトでも、1週間でも1日でもいい。労働のリハビリをしよう。僕にとって適切な、仕事との向き合い方や付き合い方を見つける必要がある。そんな風に考えた。そんな風に考えるまでも時間がかった。

バイトを探している期間はひきセン以外にも、サポステと、あるボランティア先とも僕は繋がっていた。数年ぶりの仕事が決まるまでには、1か月半だけかかった。ボランティア先の方が紹介してくれたのである。それはおあつらえ向きに3か月だけの期間の定まった仕事だった。

僕は本当に恵まれていたと思う。バイトの面接に自分から応募していたのは1件だけで、早い話、熱心には探せていなかったのだ。この期間を振り返ると、誰かや、何処かと繋がっておく必要とありがたみを、僕のような者でも痛感できる。より社会と近い所へ、じわりじわりと押し上げてくれた支援機関には感謝の気持ちしかない。

その仕事と次の仕事の間に空白は生じなかった。派遣会社に登録をして、やはり3か月間の仕事に臨んだ。登録会兼説明会に行ってみると、その場で十数個の派遣先が提示されたのだ。少なくともこの形態ならばやっていけるという自信も取り戻せたのだと思う。応募自体にも抵抗はなかった。

現在は無事に定職にも就いている。

仕事を決めるときに何を重要視するか。僕の場合は「人」だ。今ならそう答えられる。彼らとなら僕は繋がっていけるだろうと思える環境に、僕はこれからも身を置きたいと願っている。残念ながらいわゆる「やりたいこと」は、せいぜい「棚上げ」ではあるが、ことさらそれを問題視しようとは考えない。僕がひきこもりを終えたのと同様に、なんとなくでも、機会は巡ってくると信じられるからだ。

何も押し付けることなく、僕を尊重してくれた家族と諸支援機関、それにボランティア先の面々、いくつかのリハビリ先で僕に絡んでくれた方々に、あらためて感謝を伝えたい。

鳴かぬなら、〇〇〇〇〇〇、ホトトギス。僕にはなんとか、鳴くだけの力はあったようだが、ひょっとしたら鳴かされただけかもしれないぞとも思う。